



ロバート・フロストの詩, The Road Not Taken,
についての一考察：
教材として使用する場合のヒント

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 雅次 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004728

ロバート・フロストの詩, The Road Not Taken, についての一考察

～教材として使用する場合のヒント～

木村雅次

北海道教育大学函館校英語教育講座

本稿は表記の作品について、高校ないし大学の教室で教材として使用する場合のことを想定しながら、詩の意味、語法、またそれに従って教材とする場合の問題点、などについて考察するものである。さらに、一応の日本語訳を試み、教材として使用する場合のヒントに供したい、という狙いがある。

この作品は、しばしばフロストの詩を代表するような扱いを受けている作品であるように思う⁽¹⁾。確かに、主題、リズム、語法、そしてこの詩の基調になっている、皮肉とひねりの込められた揶揄、等は最もフロストらしい味わいのある作品であると言えるだろう。しかし、主題、つまり詩の具体的な意味という点ではなかなか掴み難いところがあり、必ずしも衆目の一致する解釈が出来ている、という所まで至ってはいないのではないだろうか。そういう曖昧さを残しながらも、いろいろ考えさせるところがあり、奥行きを秘めた詩である、という意味ではフロストを代表する作品であるといってもいいだろうか。

筆者としても今回この作品を取り上げるに当たっては、必ずしも明快な理解に基づいている訳ではない。ただ、この作品の解釈を巡るある小さなコメントとの出会いがあり、それがなかなか的を射ていると思い、以前から気になっていたのであるが、この際そのコメントを唯一の頼りとしながら、ひとまず取り組んでみようと思った次第である。そのコメントとは、The Explicator⁽²⁾に搭載されていたもので、以後それを元に、いささか自分の考えを加えながら考察を進めてみたい。

ひとまず原文を引用し、続けて、自分で和訳をしたものを掲げ、その後で、主題、語法、さらに教室で扱う場合の問題点などに触れて行くことにする。

The Road Not Taken⁽³⁾ by Robert Frost

Two roads diverged in a yellow wood,
And sorry I could not travel both
And be one traveler, long I stood
And looked down one as far as I could
To where it bent in the undergrowth ;

Then took the other, as just as fair,
And having perhaps the better claim,

Because it was grassy and wanted wear ;
Though as for that the passing there
Had worn them really about the same,

And both that morning equally lay
In leaves no step had trodden black.
Oh, I kept the first for another day !
Yet knowing how way leads on to way,
I doubted if I should ever come back.

I shall be telling this with a sigh
Somewhere ages and ages hence :
Two roads diverged in a wood, and I ...
I took the one less traveled by,
And that has made all the difference.

選ばれなかった道 ロバート・フロスト作
木村雅次訳

黄色の森の中で、道がY字状に分かれる箇所に来た。
残念ながら、両方の道を選ぶことはできない相談。
しかもひとり旅の身、私はそこで暫く立ち止まり逡巡。
目を凝らし、まず最初の道をよく眺めた。
その道がずっと延びて、下生えの中に曲がりくねって消えているところまで目で追った。

そして結局、二番目の道を選んだんだ。その道は、結構、最初と同じ位いい道だった。
それに、多分、こちらの道を選ぶべき正当な理由があった。
草が生え、踏みつけられるのを待っていたのだから。
しかしちょっと待ってくださいよ、道を辿るということは、
結局はどちらの道でも、同じような踏みつけ方をすることになるんだよ。

それに、あの朝、両方の道とも、
踏みつけられた黒い足跡などない状態で枯葉に埋もれていたではないですか。
えっ！最初の道は別の日に行けばいいんだ、とおっしゃるのですか！
でもご存じの通り、私たちは次々に分岐していく道を次々に辿って行くことになるのでしょう。
ですから、また、この分岐点に戻ってくることはないと思うのですがねえ。

私はこのような問答をまた繰り返すことになるのだろう、ため息をまじえ、

今から何年も何年も経過した, 年老いた将来の, ある日に。
つまり, ある森でY字状の道に差し掛かる, と。そこで私は…
私は結局は旅人の足跡の少ない道を選んだ, と。
そしてそのお蔭でまったく違った人生を送れることになったのだった, などと。

一応の和訳であるが勿論十分ではない。授業に於いては, 意味を十分に伝える為には説明が必要だろう。そこで, The Explicator, のヒントに従ってこの詩を三重の構造において捕らえたい。The Explicator, は次の様な三段階の年齢を想定している。即ち,

The complexity of the attack in “The Road Not Taken” depends upon our paying close heed to the three distinct ages of the persona in the poem and realizing that late in his life speaker faces again a choice between a more- and a less-traveled road.⁽⁴⁾

明確な三段階の年齢, つまりこの詩の「語り手」の経過する三段階の年齢のことを想定しながら, 詩の意味を解説しようとするものだ。詩は, これらの三つの年齢に於いて, 語り手がどの道を選択したのか, を巡って展開することになる, というものだ。このヒントはこの詩の理解に, 大変, 分かり易いアプローチの方法を示唆してくれている, と思う。まず, 最初の三つのスタンザでは, 中年になった「語り手」が若い時代の自分のことを思い出しながら, やや, 皮肉を込めながら, 諭すような口調で, 或いは, モッキング (mocking) な口調で振り返っている (この調子が, 実は, この詩のフロストらしい特徴を醸し出すことになっている)。The Explicator はこの点を次のように解説してくれている。

The first three stanzas of the poem present the differences between the younger self and the poem’s speaker, which I call the middle-aged self, not the younger self, who admits to and purposely stresses the similarity of the two roads.⁽⁵⁾

つまり, 若い時代の自分と, 中年の自分と, 老年期の自分が設定されていることの指摘である。そして詩は, 「中年の自分」の視点 (正しく, 道徳的な視点) が基本となって展開している。その語り口は, 揶揄的, あるいは, ややモッキング的, なのであるが, 詩人フロストの思想を踏まえたものなのである。そしてその思想のポイントは, Y字に分岐した道は, 実は, いずれも同じような状態の道なのであり, なにかの理由, ないし, こじつけのようなもので片方の道を選択したことに特別の正当性がある訳ではない, ことを強調することにあるのである。従って, この詩は, しばしば誤解されるような, 道を選ぶに際しての単なる逡巡, ないし不決断をテーマとしているものではない。むしろ, 詩人の極めて明確な方針が思想の裏付けとして存在しているのである。さらに, The Explicator のコメントの中で, この詩を理解する上で核心に触れた部分があるので, それを引用する。

The younger self is perhaps too dismayed with or too “sorry” about the nature of choice to notice that “passing there / Had worn [the two roads] really about the same, / And both that morning equally lay / In leaves no step had trodden black.” These observation about the roads’ similarities come to us from the middle-aged

self's corrective, more truth-seeking voice.⁽⁶⁾

ここで分かるように、コメントは、この詩の主題に触れながら、「中年の自分」、つまり「現在の時点の話し手」が「若い時代の（自分の）」選択に際しての勝手な理由付けを論じている、ことを指摘している。ここはこの詩の理解の上で大変重要な部分だ。つまり、「先人の足跡の少ない道を選んだ（踏みつけられた跡が少ない道を選んだ）」という理由付けは、なんの正当な理由はない、ということである。現在の話し手の立場（そして正しい立場）は、どちらの道も同じ条件だった、ということにある。

これらのコメントに則しながら、原文の詩に当たってみることにすると、まず、若い自分（未熟な自分）と中年の自分（一番正しい立場で若い時代と老年の時代を見通している自分）の対話が第三スタンザまで続き、第四スタンザは、老人になった時の自分（やや耄碌して、過去を忘れ、傍若無人の態度を取る恐れのある自分）はどのような立場をとるかが想定されている、という構成になっていることが分かる。さらに、第二スタンザの三行目までが、若者としての自分がとった立場であり、それ以降第三スタンザまで、中年の立場の自分がそれを論ず、という形式をとっている。

さらに、第三スタンザの二行目までをもっと詳しく辿ることにする。まず、第一スタンザの、yellow, が問題になろう。これは、日本語の“暮色”ないし“夕暮れ”というニュアンスではないように思う。むしろ、青二才の未熟な“黄色”（曖昧な色）であり、時間的には朝、と取りたい。何故ならば、未熟な青年の決断力の欠如に囚われている状態を指している訳であるし、第三スタンザの、that morning, は第一スタンザの分岐点に至った時のことを言っている訳だから。

一方、決断力に乏しいはずの若い自分は、実際は、軽率な決定を下してしまっている。それが、sorry, 以下で叙されている。“ソリー”と言い、“二ついっぱいには選べませんよ、”という口調の中に、軽く、軽率で、深い思索のできないものの発言であることを匂わせようとしていることに気づく必要がある。続く行の、“所詮は一人旅だし、暫し佇んで”の表現にも、表層的な行動しか出来ないものの特徴を読み取らなければならない。四行目では、one, は最初に辿ろうとして見た道であり、“出来るだけ奥まで見た”とあるが、実は慎重さに欠けている見方なのである。それは五行目の“下生えの中に消えていく所まで”見た、とする表現とペアになっているのだが、ありふれたクリシェ的な表現と見るべきであろう。

第二スタンザに至ると突然、第一スタンザの流れが捨て去られ、第二の道を選んだことが報告されている。第二スタンザの二行目及び三行目はいずれも第二の道を選んだ理由（ないし、こじつけ）になっている。即ち、“最初の道と同じくらいすっきりしている”と言いながら、この道を選ぶべき“いい理由（the better claim）”があるのであり、それは、“草が生えており、それは踏みつけられることを望んでいるのだ（wanted wear）”という具合に、やや、自分勝手な理由を付けて行く。語り口は若者らしく軽快なのであるが、重厚性に欠け、信憑性にも欠けるのである。結論的に言うなら、ここまでのプロセスの特徴は、この若者の選択が軽率で、身勝手な理由の基で行われたことが示されるようになっていく、ということである。

第二スタンザの四行目から、トーンが急に変化して行く。即ち、ここから、話し手は、現在の、つまり、The Explicator のコメントに従えば、中年に至っている話者が、若者を諫めるような口調に変わる（自己反省的でもある）のである。そして、それは大変フロスト的な揶揄、皮肉（モッキング）の口調を帯びることになる。そしてこれは第三スタンザの最後の行まで続く。つまり、こうだ。九行目の、Though as for that は、“そのことなただけで”、ないし、“それについて述べさせて頂ければ”という調子で、それまでとくとくと述べてきた若者の選択の過程にいちいちコメントして（しかも、揶揄、皮肉、モッキングの口調で）、つまり修正を加えていく口火を切ることになっている。次の、the passing there の意味はなかなか難解なのだが、“道を通ること（人生を通ること）”という一般的な意味、もっと突き詰めれば、“どのような道を歩も

うとも、その歩き方で行けば”という程の意味に相当するのではないだろうか。そして次の行、十行目の、them は、The Explicator のコメントにもあるように、the two roads であり、“もし、どちらの道を辿ったとしても、同じような踏破のされ方をしたであろう”，となる。

それと言うのも、第三スタンザの冒頭から二行目にかけて、「中年の話し手」が指摘しているように、“その日の朝、両方の道とも、実は、同じ状態だったではないですか、／（両方の道とも）木の葉に埋もれ、誰かに踏みつけられて黒ずんだ足跡が残っている訳でもなかったではないですか”と続いていることから分かるように、若者の観察が正確でなかったことが指摘されることになっている。

そして第三スタンザの三行目は、「中年の話し手」が自分のはっきりとした立場を示すような形で、発言している部分である。即ち、若者の口調を真似しながら、半分おどけてみせ、また、半分あきれ顔で、「えっ！最初の道（つまり、選ばなかった道）は別の日にまた歩いてみる、とおっしゃるのですか！」となる。そして次の行に繋がって行くのだが、次の四、五行目は分かりやすい。即ち、「道というものは、ご存じの通り、次々に枝分かれしており、私たちもそれに従い次々にその道を辿って行くことになるのであり、決して戻ったりすることのないことぐらい、ご存じのはずですがねえ」という意味、そして揶揄、論しの伴った口調となろう。

結局、第三スタンザに至って、詩人の狙いが、少し、見えて来るように思えるのである。つまり、ある「道」を辿るようになることは、なにかの理由（草が生え、その草を踏みつける必要があるとか、先達の足跡が少ないとか）があったからそうなったのではなく、もっと別の理由、或いは、“理由の無い理由”によってそのようになったのであり、ある意味では人間の意思や理性の及ばない動機によって決まっていくものである、ということである。

さらに付け加えるなら、「道を選ぶ」ことがこの詩のテーマではあるが、フロストの狙いは、その選択の段階で、ひとは逡巡するものだとか、躊躇するものも仕様のないものだとか、或いは、人間の弱さを指摘したり、同情したりする、という所にあるのではないということである。ただし、若者が選択に当たっては、逡巡しながらも軽率であったこと、思慮が足りなかったこと、に対しては、やんわりとながら、はっきりと諷めている。そしてこの流れは、最後のスタンザに引き継がれていく。実は、老人になっても、若者に発せられた諷めは生かされそうもないのである。

第四スタンザに至って、揶揄、皮肉の口調が明瞭になっている。或いは、“嘆息をつきながら” (with a sigh) 呆れた様子 of 口調が特徴となっている。即ち、第一行目から第二行目にかけて、「今から何年も何年も経った後でも（つまり、自分が老人になった段階でも）、これと同じようなことを繰り返し言うことになるのだろうか」と自嘲混じりに想像している。そして、締めくくりの三行が来るのであるが、冒頭のラインがリフレインされ、第二スタンザで示されている軽率な選択の轍を踏むこと（つまり、“先人の足跡の少ない道を選ぶ”こと）が予想されている。さらに軽率な台詞を追加して、詩全体を締めくくる。即ち、「それでそのような選択をしたお蔭ですべてが違った風に行ったのだよ（つまり、うまく行ったのさ）」と。勿論、その無知さ加減に呆れながら、言うのである。

The Explicator は、第四スタンザの三行目のダッシュの使い方について穿ったコメントをしている。それによると、他の研究家のコメントと比較しながら、“presumably Frost added [the dash] to make the whole thing more expressive and heartfelt”, but I believe Frost’s adding the dash clarifies that the older self is poised, like his younger self, before two roads, and like his younger self “long [he] stood” before making his choice.⁽⁷⁾とやっている。この詩の語り手、特に若い語り手は、「道」の選択の際の、“即席かつ軽率”な行動パターンから分かるように、行動にとまなう筈の合理的的精神は持ち合わせていないのである。従って根底には常に躊躇逡巡があるわけである。その延長的人物の老人であるから、“ダッシュ”は逡巡の様子を明瞭に

する為、という見方の方が的を射ている。

もう一点、この詩を考える上で面白いヒントになることは、第四スタンザの三行目の、in a wood, の前に付くべき、yellow という形容詞が何故抜けているのかということである。既に述べたように、この行は第一スタンザの第一行目のリフレインであるから、この形容詞が当然付いていなければならない。理由としてまず考えられることは、The Explicator の言うように、毫礫して忘れた、ということである。第一スタンザで触れたように、この「黄色」は“暮色”とか“夕暮”ではなく、“未熟”なことを示唆するためのものである（しかも第一スタンザの時刻は朝だ）。そこで老人になった段階で「黄色」のことを忘れてしまっていたとしても、ささいな見落としとして、それは許せる。しかし、その朝見た二つの道がどちらも同じ様な状態のものであった、ということを見逃した態度は許せない、と The Explicator は言う。つまり、If the older oneself can no longer remember that the wood was “yellow,” we certainly can forgive him his lapse. However, what is less forgivable to us is that the older self ignores what the middle-aged self had come to know about that first choice: that “both [roads] that morning equally lay.”⁽⁸⁾つまり、「中年」の時点で確認した、“二つの道はいずれも同じ”，という観察が実はもっとも重要なことなのであり、そのことを無視することは許せない、ということだ。結局、老人の自己欺瞞（つまり、毫礫のせいで）が、認識の誤りをもたらすことになるだろう、と想定されている。結局、若者は未熟の故に、そして老人は毫礫の故に、認識を誤まる。そう考えると、「黄色」を付けないことにより、忘却癖に取りつかれた老人段階の時期を強調することができ、そのことによって時間の経過を明瞭に印象付けることができることになる。

ここまでは、The Explicator のコメントに従うことができるのだが、その結論として、若者が辿った道と老人が辿ることになる道は誤謬の道であり、中年の辿った道が唯一正しい道だ、と展開している推論には納得できない。つまり、Therefore, the road not taken by the older self is the road of truth; the road the older self does take is that of deception, which is, I imagine Frost might say, actually the more traveled path, for it is the one traveled by both the speaker's younger and older selves.⁽⁹⁾というコメントは少々飛躍だと思わざるを得ないのだ。なぜなら、第二スタンザの第四行から第五行で語り手が言っている通り、どちらの道を行っても踏破する際の苦勞ないし喜び（つまり、「道」を人生の比喩と取るなら、“苦勞”ないし“喜び”等、人生に伴う感動と取ることが可能だろう）を伴っただろう、という認識と合致しないことになるではないか。

結論的に言えば、筆者の理解は、この詩の中で汲み上げるべきテーマは、どちらの道を選んだとしても、価値ある旅程、有意義な旅をすることになる、ということにある。「先人の足跡の少ない道を選んだ」という点を取り上げ、メインストリートから外れた道を選んだ詩人フロストの人生になぞらえる、という解釈はしない、というのが筆者の立場である。ましてや、人生の道の選択に躊躇する詩人の姿を表したもの、また、結局自分の選択した道に満足している詩人の様子を描いたもの、でもないだろう。

さらに結論的なことを補足すると、この詩の趣旨は、若い未熟な自分を非難しているのだとか、反省を生かすことの出来ない老人としての自分を非難することにあるのではない、ということである。基本的には中年としての自分が選択した道が正しいものとして示されてはいるのだが、それとても片方の選択より優れている、とか優れていないとか、比較の対象にしているのではない、ということである。“大変トリッキー”な詩である、という所以はこんな所に隠されているように思うのである。

以上、The Explicator のコメントを頼りに、詳細に辿って来たつもりだが、全てがすっきりした訳ではない。しかし、教室の教材として扱う場合の、考える手掛かり、詩の意味を深く探るヒント、は供給できたものと信ずる。

注

- (1) 例えば, Louis UNTERMEYER は著書のタイトルとして, THE ROAD NOT TAKEN (AN INTRODUCTION TO ROBERT FROST, A Selection of ROBERT FROST'S POEMS with a Biographical Preface and Running Commentary, HENRY HOLT AND COMPANY, NEW YORK) を使用している。また, 多くのフロスト撰集でも, この詩は主要な作品としての扱いを受けているように思う。
- (2) The Explicator, Vol. 49., No. 4., Summer 1991, "Frost's THE ROAD NOT TAKEN" by WILLAM GEORGE, St.Louis Missouri pp. 230-231.
- (3) COLLECTED POEMS OF ROBERT FROST; LONGMANS, GREEN AND CO. LONDON / NEW YORK / TORONTO 1930 から引用。
p. 131 参照。
- (4) The Explicator, *Ibid.*, p. 230.
- (5) The Explicator, *Ibid.*, p. 230.
- (6) The Explicator, *Ibid.*, p. 230.
- (7) The Explicator, *Ibid.*, p. 231.
- (8) The Explicator, *Ibid.*, p. 231
- (9) The Explicator, *Ibid.*, p.231.

(本学教授・函館校)